

小国リトアニアの歴史認識問題

ホロコーストの記憶をめぐって

野村真理

はじめに

かつての戦争や植民地支配で、侵略国あるいは支配国とその犠牲者のあいだの歴史認識問題は、多くの場合、加害国が自国の過去の行為の加害性を認識する仕方と、その認識の実践にかかわって発生する。よく知られているのは、旧ドイツ連邦共和国（旧西ドイツ）の場合であろう。ドイツは、「過去の克服」という言葉で総称される一連の取り組みにおいて、ナチ・ドイツの暴力支配を真摯に反省し、犠牲者への金銭的補償のみならず、たとえば現代史に重点をおいた歴史教育など、反省を政策や制度面において実践してきた。

しかし、加害と被害の関係は、ときとしてそれほど明快な二項関係を形成するとはかぎらない。被害者が、加害者に対して、別の加害者と手を組んで対抗することもありうるし、あるいは被害者が、別の被害者に対しては、その被害者の加害者に加担し、加害の片棒を担ぐこともありうる。そうすると、加害と被害の関係は幾重にもねじれてゆかざるをえない。これは、実際、第二次世界大戦中、スターリンのソ連とヒトラーのドイツの狭間におかれた東ヨーロッパの国々が体験したことだった。

ここでは、一例として、リトアニア人のホロコーストへの加担とその記憶の問題を取り上げたい。というのも独ソ戦開戦直後のリトアニアでは、侵略者であるナチ・ドイツに対して、リ

トアニアのソ連支配からの解放者の役割が期待されるという転倒が起こり、その転倒のなかで、リトアニア人による最初のユダヤ人虐殺への加担が起こったからである。

リトアニア人とホロコースト

第一次世界大戦後に独立をはたした小国リトアニアの運命は、他の東ヨーロッパの国々と同様、ナチ・ドイツとソ連という他国によって勝手に決定された。すなわち1939年8月の独ソ不可侵条約に付随した秘密協定は、独ソによる東ヨーロッパの分割支配を取り決めていたのである。1939年9月1日、ナチ・ドイツがポーランドに侵攻した後、ソ連は、東部国境を越えてポーランドに侵入すると同時に、バルト3国の支配に着手した。リトアニアは、翌年1940年8月、ついに独立を喪失して、ラトヴィア、エストニアとともにソ連邦に組み入れられた。

この独立喪失とリトアニア国民の同意なき国家の社会主義化が、人々の反ソ感情をあおったことはいうまでもない。反ソ感情は、ポリシェヴィキの殲滅を唱えるナチ・ドイツへの共感につながり、リトアニアの反ソ抵抗組織は、リトアニアのソ連支配からの解放と再独立の期待をナチ・ドイツのソ連攻撃にかけた。おりしもリトアニアで、人狩りという語がふさわしいほど大規模な反ソ分子の逮捕とソ連奥地の収容所への追放が行われ、人々を恐怖のどん底に突き落

としたのは、独ソ戦直前の1941年6月半ばのことであった。

他方、ソ連の支配に対し、リトアニアのユダヤ人の受け止め方は異なっていた。ユダヤ人にとって、ナチから自分たちを守りうるのはソ連の赤軍のみであり、無神論の共産主義を否認する熱心なユダヤ教徒にとってさえ、ヒトラーと比べればスターリンは小悪だったからである。

また、戦間期のリトアニアでは、法律上の平等とは裏腹に、ユダヤ人に対する社会的差別は歴然として存在した。とりわけリトアニアが1926年末以降、民族主義的、権威主義的独裁支配体制へと移行すると、ユダヤ人の経済活動からの排除が進められた。ところが、1940年に設立された共産党政権の下で事情は一変する。ユダヤ人であっても、能力があれば、まして共産党員であれば、政府の要職につくことさえ可能になったのである。そのため、特にユダヤ人の若者にはソ連体制に将来の希望を見出した者もいたが、他方で、このことは、リトアニア人にとってはリトアニアに対する裏切りであった。リトアニア人は、かつての自分たちのユダヤ人差別を棚上げして、ポリシェヴィキ支配とユダヤ支配を重ね合わせるナチの論理に共鳴した。

こうしてリトアニア人とユダヤ人の関心が反対方向をむくなかで、ユダヤ人の最初の悲劇が起こる。すなわち1941年6月22日に独ソ戦が始まったとき、リトアニアの反ソ抵抗組織は、ナチ・ドイツのリトアニア侵攻を歓迎し、そのナチの挑発に乗り、ソ連支配の協力者にしてリト

アニアの裏切り者であるユダヤ人に対し、報復としての大量虐殺に手を染めたのである。独ソ戦開始後の2週間のあいだに、リトアニア人あるいはリトアニア人とナチの共同行動によって殺害されたユダヤ人は、リトアニア全土で7000人から1万人ともいわれる。

その後、ナチ・ドイツがリトアニアの再独立を容認しなかったかぎり、解放者ナチに対する当初の期待は失われたが、ことナチのユダヤ人迫害に関するかぎり、リトアニア人は、自国のユダヤ人の運命に関心を持たなかった。当時のリトアニアの約20万人のユダヤ人の絶滅は、リトアニア人の無関心のもと、ナチに対する消極的協力あるいはリトアニア人補助警察等の積極的協力を得て、支障なく執行されたのである。

■ ホロコーストの記憶

しかも、ホロコーストの記憶は、戦後、リトアニア人が体験した恐怖によって急速に曖昧化した。リトアニアは1944年夏、ソ連の赤軍によってナチ・ドイツから解放されたが、リトアニア人にとってこれは、ソ連の恐怖支配の再来に他ならなかった。戦後リトアニアでは、反共主義者やリトアニア民族主義者と見なされた者たちの粛清が容赦なく執行される。リトアニア人は激しくこれに抵抗し、1953年頃、対ソ・パルチザン闘争が徹底的に鎮圧されるまで、大量の犠牲者を出すことになったのである。

「森の兄弟」と呼ばれた彼らパルチザンは、リ

トアニアの愛国者により英雄視され、ソ連の犠牲者として記憶されたが、先に述べたように、独ソ戦下の反ソ抵抗組織がナチのホロコーストの加担者となった事実は忘れられた。さらに、ソ連の公式の歴史学によるナチの犠牲者の匿名化が、忘却に拍車をかけた。ソ連では、第二次世界大戦は大祖国戦争と呼ばれ、ソ連国民が一丸となって戦ったこの戦いの犠牲者において、ユダヤ人のみを特権的に語ることは許されなかった。

もちろん、ナチに殺された者の多くがユダヤ人であり、殺害にあたってリトアニア人協力者がいたことは、ソ連時代に必ずしもタブー化されていたわけではない。しかし、ソ連時代の学校では、ナチに協力したのはリトアニアの反革命的ブルジョア・ナショナリストであったと教えられた。このように、ナチ協力の罪がブルジョア・ナショナリストに帰されたことにより、リトアニア人のプロレタリア大衆は、反省を伴うことなく無罪化されたのである。しかし、大衆は、一方では無罪化の恩恵を被りながら、他方でソ連当局のいうブルジョア・ナショナリストは、彼らの意識のなかでは罪人ではない。彼らは、それが彼らの英雄、森の兄弟たちのことだと知っていた。彼らの意識のなかでは、ユダヤ人の場合とは逆に、スターリンに比べればヒトラーは小悪だったのである。

おわりに

リトアニアは1991年にソ連からの独立を回復し、2004年5月1日、ラトヴィア、エストニアと



PROFILE

野村真理
(のむら まり 1953年生)
日本学術会議第一部会員、金沢
大学経済学経営学系教授
専門：社会思想史、西洋史

ともにEU（欧州連合）に加盟した。それまでのリトアニアで、ナチ・ドイツとソ連の二重の犠牲者としての意識のみが強烈であったとすれば、もはやリトアニアが犠牲者の役割だけを演じていけばすむ時代は終わった。EU加盟に先立ち、1995年頃からリトアニアでは、旧西側世界からの外圧と、リトアニア人自身の内側からの努力により、かつて自国に存在した反ユダヤ主義や、リトアニア人とホロコーストのかかわりも含め、自国の過去を批判的に検証する作業が開始されている。この作業を抜きにして、リトアニアの真の独立はありえない。

しかし、はじめにもどれば、みずからの加害性の認識は、犠牲者側の痛みとはまったく別種の痛みをとまなう。犠牲者の痛みは怒りに転じ、犠牲に対して謝罪を要求する感情は国民のあいだに強烈な求心力を発揮する。しかし、そのような犠牲者の前に頭をたれる痛み国民の求心力を持たせることは、容易ではない。これは、日本も他人事ではない問題として自覚しておくべきだろう。

付記：以上について、詳細は、拙稿「自国史の検証 リトアニアにおけるホロコーストの記憶をめぐって」(野村真理・弁納才一編『地域統合と人的移動』御茶の水書房、2006年)で論じた。